

共同研究室

報告要旨 I 課題の意味

昭和四十三年度第四回研究会（九月二十日）

▼テーマ 「シュムペーター理論の再検討」

―低開発国に対する適応性をめぐる論争―

報告者 浜崎正規氏

（報告要旨は第十七巻、第三・四号に掲載）

昭和四十三年度第五回研究会（十月十一日）

▼テーマ 資本による労働の実質的抱摺の深化

―自由競争段階から独占段階への展開について―

報告者 坂本和一氏

（報告要旨は京大・経済論叢第一〇二巻、第五号）

昭和四十三年度第六回研究会（十月十八日）

▼テーマ 「戦時強制労働体系について」

―国家独占資本主義労働問題として―

報告者 三好正巳氏

報告要旨 II 課題の意味

(1) 今日的課題との連節点

(2) 戦後社会政策論争との連節点

(3) 社会政策学体系との連節点

II 戦時体制の再生産構造における特徴

(1) 農業危機と低賃銀労働関係の再生産

(2) 軍事経済体制化における生産集積（―金融資本の確立）

(3) 戦時軍事経済体制と労働市場問題

III 労働力の絶対的不足と強制労働の復活

(1) 封建的労働制度の後退と労働力の質的転換・向上過程

(2) 労働編成における逆転と労働力の絶対的不足

IV 強権的強制労働体系とそこでの労働問題

(1) 労働編成における国家直轄性の擬制

(2) 労働配置政策と生活管理の復活強化

(3) 強権的・強制労働体系下の労働問題の特質

V 国家独占資本主義労働問題の課題

―国家独占資本主義社会政策論の構造―

昭和四十三年度第七回研究会（十月二十五日）

▼テーマ 西ドイツの社会と農業

— 現地での見聞をもとにして —

報告者 大數輝雄氏

昭和四十三年度第八回研究会（十一月二十二日）

▼テーマ 近代経済学批判の目的と方法について

報告者 小野 進氏

（報告要旨は第十七巻、第一号、第二号研究欄に掲
載）

昭和四十三年度第九回研究会（十二月六日）

▼テーマ 経済学批判と疎外論

— マルクス研究の最近の動向にふれて —

報告者 細見 英氏

報告要旨 マルクス研究のさいきんの著しい特徴は、マルク
ス主義を思想、イデオロギーから解放して、「科学」として
純化させようとする傾向である。宇野理論は従前からこの方
向で理論的営為をいとなんできたが、さいきんは宇野派以外
からも、こうした志向をもつ研究があらわれている。広松渉
氏の一連の論作（『マルクス主義の成立過程』、『エンゲルス論』、
いづれも一九六八年刊）や、アルチュッセルの『甦るマルクス』
（邦訳一九六八年、原書は一九六五年）などを、その例としてあ

げることができよう。

これらの論者は、マルクス主義における疎外論の意義を消
極的にしか評価しない点で共通している。たとえば広松氏は、
『経哲手稿』の疎外論をささえる「主体概念」、すなわち「類
的本質」としての「人間」なるものは、のちに『聖家族』で
マルクスがヘーゲルを批判して摘発する「果物なるもの」と
同様の悟性的抽象物であって、「人間の自己疎外とその止揚」
という発想は、それ自体一個の思弁的構成にほかならないと
裁断する。広松氏によれば、エンゲルスが主導した『ドイツ
・イデオロギー』でマルクスは、「哲学的良心」としての自
己疎外論を清算していったというのである。アルチュッセル
も、若きマルクスのイデオロギー的問題設定と、『資本論』
の科学的問題設定とのあいだには、「根本的な差異」、「認識
論上の切断」があるとなえ、『経哲手稿』の疎外論は『ド
イツ・イデオロギー』で克服されていくと説いている。

『経哲手稿』の疎外論は哲学的・イデオロギー的・人間学
的問題把握であって、そうしたものは『ドイツ・イデオロギ
ー』における唯物史観の成立によって克服止揚されていくの
だという解釈は、すでに以前から存在してきた公式的見解で、

広松氏やアルチュッセルの主張はけっして新しいものではない。ただ、「構造主義」とかいった見かけ上の新規さをもといながら、あるいは『ドイツ・イデオロギー』編集上の新たな研究段階(この点での広松氏の功績は、高く評価されるべきである)をふまえて、再生産されているにすぎない。

だがこれらの論者は、資料的にも論理的理論的にもまちがっている。資料の上からいうならば、アルチュッセルにせよ広松氏にせよ、『経済学批判要綱』に目を通されたことがないのであるか。『要綱』の経済学批判の論理展開は、もっぱら、疎外論を基軸として展開されている。この点は、宇野派の塚本健氏さえ明確に認めて書いている、「『経済学批判要綱』では労働疎外論は随所にみられ、それをつうじて経済学の展開がはかられているとさえいえる」(『思想』一九六八年第五号、「物化と自己疎外」)。まさしく、そうなのだ。ただし塚本氏は、『経済学批判』になると「疎外」ということばは使われなくなっていると言ひ、こんどは『要綱』(一八五七〜八年)と『経済学批判』(一八五八〜九年に執筆)とのあいだに「決定的な転換」、「哲学的方法の清算と経済学の経験科学としての確立」を認めようとしている。これによって、イデオロギ

ーや思想から脱皮した経験科学としての『資本論』、原理論としての『資本論』という宇野理論的『資本論』解釈と、ツジツマをあわせようとしているのである。

『経済学批判要綱』の疎外論的論理展開に気づかない論者たちは、『経哲手稿』と『ドイツ・イデオロギー』のあいだに「認識論上の切斷」を設定する。『要綱』の疎外論に気づいた論者は、『要綱』と「批判」とのあいだに「決定的な転換」を設けようとする。だが、これらはいずれも無理で誤った立論だ。前者の誤りは、後者の議論の存在そのものが証明している。後者、塚本氏流の議論の誤りは、資料的には「直接的生産過程の諸結果」を読むとき、たちどころに明らかになる。一八六三―四年頃に執筆されたこの草稿において、「疎外」はことばとしても論理としても重要な役割をはたしている。とすると今度は、「直接的生産過程の諸結果」と『資本論』とのあいだに「決定的な転換」を設けようとするのだろうか? これらの論者が「切斷」、「転換」を好むのは、『資本論』をは疎外論とか人間解放のイデオロギーとかとは無縁な、純粹経験科学として描きあげようとするためである。しかし、「認識論上の切斷」、「決定的な転換」はむしろ、これらの論者

のえがくマルクス主義と、マルクスのマルクス主義とのあいだに存在するのではないか。『資本論』をもつばら、哲学的意識の清算の上に成立する経験科学としてとらえようとする見地と、人間の自己疎外の実践的止揚の立場にたつて経済学批判を徹底し、これによって人間解放の実践的立場をうらづけ発展させていこうとする、マルクスの見地とのあいだに、決定的な断層が存在するのではないか。恣意的なマルクス解釈をマルクス自身の文献資料にのつとつて「論証」しようとするとき、無理、首尾不貫、論理的破綻は避けるべくもない。

問題の中心は、一つは『資本論』の論理構造、『資本論』における思想と科学をどうとらえるかにあり、もう一つは、疎外論の論理と意義をどう把握し評価するか、にかかっている。いかに疎外論についていふならば、人間の自己疎外とその止揚とは、現実社会の實在的矛盾を直視し、これを実践的に止揚して人間解放を達成しようとする、現実的実践的な立場の表明である。疎外論は、一個の「悟性的抽象」としての「人間なるもの」を独断的に措定して、現実の人間はそうした「人間なるもの」の自己疎外態である、それゆゑ疎外を止

揚して本来の人間性に復帰すべし、といった、独断的人間学的な、観想的過程的な、後向きの議論ではない。疎外以前に、疎外に先だつて、まったく人間性の実現を仮定するものではない。人間本質、人間なるものを一個の实体として想定し、これを運動の主体たらしめてそれからの疎外、という形でしか、疎外論の論理を把握できないひとは、公式マルクス主義に根深くこびりついた思惟様式、客観主義的・歴史主義的・過程的な思惟様式の限界をのりこえることなく、この限界内から疎外論の解釈をおこなっているにすぎない。だが疎外論こそ、そうした客観主義的・過程的な思惟様式とは根本的に異なる、まっとうから対立する論理なのだ。

マルクスの疎外論にいう真の人間性は、現実社会の實在的矛盾をふまえて、これの実践的止揚によって実現すべきものとしてかかげられるゾレンである。ただしそれは、中空にうかぶ抽象的ゾレンではない。それは、矛盾の現実のうちにはらまれている人間的可能性の予覚である。したがって、人間解放のこのゾレンは、實在的矛盾の止揚によって達成されるべき実践的目標の設定であると同時に、現実のうちに可能性として形成され、はらまれている人間的本質の析出への促

迫である。そうした可能性としての人間の普遍と、實在的特殊との矛盾のからみあいにおいて、現実の總体的把握がなしとげられるとき、当初は予覚的直観的に抽出措置された実践的課題設定が、現実的理論的ならづけを与えられ、ゾレンをザインに転化する実践への現実的指針が与えられることとなる。こうした意味で、自己疎外とその止揚は、人間解放の実践的課題設定であると同時に、これをうらづける理論の深化へとかりたてる理論的課題設定であり、かかるものとして、マルクスの人間解放の実践哲学と経済学批判とをつらぬく基軸的テーマをなしているのである。

疎外論がマルクスの実践哲学と経済学批判をつらぬく基軸的テーマであること、疎外論ゆえにマルクスの経済学批判が経済学批判たりえていること、疎外論を媒介とした実践哲学と経済学批判との、思想と科学との、相互媒介的同一性、マルクス主義のこうした構造は、『経済学批判要綱』の論理を追跡するとき、まったく明らかになる。そのとき、『経哲手稿』と『資本論』とは方法的に切断されるどころか、両者のあいだに一本の太い発展線のつらぬいていることが、認められるであろう。『経済学批判要綱』は、初期マルクスと後期

マルクスとの、哲学者マルクスと経済学者マルクスとの、疎外論と経済学との、関係を解くカギを提供しているのである。

研究会報告で私は、以上のような視点から『経済学批判要綱』の論理の追跡をこころみた。その内容は、いづれ論文の形にまとめて、あらためて報告することとしたい。

▲本年度（昭和四三年四月以降四四年三月迄）会員が本誌以外に発表した業績は、つきのごとくである。

後藤 靖

経済学の基礎（共著）

有斐閣

国民之友総索引（共編）

明治文献刊行会

日本近代史分析の一視角（上）

▲歴史評論ⅴ四三年四月号

民衆論の必要性について

▲岩波講座「哲学」月報ⅴ十一号

書評 遠山茂樹著『戦後の歴史学と歴史意識』

▲朝日ジャーナルⅴ四三年九月一日号

細見 英

『資本論』の論理構造―梯経済哲学批判序説―(中)

思想 昭和四三年七月

編集後記

川本和良

書評 松田智雄「ドイツ資本主義の基礎研究」

土地制度史学 第四二号

中壁 肇

ヘーゲル

中央公論社 昭和四三年十一月

自我と自然―近世哲学のあゆみ―

哲学のすすめ 所収

筑摩書房、昭和四四年一月

坂本和一

「一九世紀中葉における資本の直接的生産過程

『資本論』第一部第十三章の歴史的解釈」

経済論叢 京都大学 第一〇二巻、第五号

関 弥三郎

書評 ウォーリス・ロバート共著「統計学入門」

高木 秀玄 訳

D・ハフ著「統計でウツをつく法」

高木秀玄訳 経済論集 関西大学、第一八巻、第五号

共同研究室

一一九 (一一九)

昨年一二月以降の大学紛争の嵐のなかで会員一同は発刊に従事する余力を失し、『立命館経済学』第一七巻第五、六号を欠号にするの余儀なきに至った。本年度の学会誌が欠号をふたたびつくることなく継続的に発行されようよう努力していきたいと思っている。

なお、大学紛争において提起されている問題は広くかつ深く、当学会においても学会のあり方をめぐって、そこから発してくるさまざまな問題について自主的にその検討と改革にとりくみつつある。